

女性ならではの視点を もとに、近代日本文学の リアルな姿を追究する



Navigator

文学部 / 国文学専攻

関 礼子 教授

Reiko Seki

関 礼子 (せき れいこ)

1949年、群馬県生まれ。群馬県立渋川女子高等学校卒業。立教大学文学部日本文学科卒業。立教大学大学院文学研究科修士課程修了。同大学院文学研究科日本文学専攻博士課程後期課程満期退学。亜細亜大学経済学部教授等を経て、2011年より現職。

恩師・前田愛教授との 出会いに、自らの進路を見出す

関先生は大学時代、英文科から国文科に転科した経歴を持つ。もともと国語は好きだったが「大学で専門的に学ぶ」ことに躊躇して一度は英文科を選んだ。けれど、国文科に移って「自分の居場所はこちらだ」と実感した、と先生は笑う。

そして先生は人生の転機を迎える。ゼミで前田愛教授に出会ったのだ。

前田先生は、学問対象として見なされていなかった近代日本文学を学問領域として確立した、いわばパイオニアの一人である。「私は、先生のゼミに初めて所属した女子学生。それも、ずいぶん気にかけていただきました」前田先生のもともとの専攻は近世の日本文学。近世と近代、現代とを比較する複眼的な視点を持つっており、関先生にも英文学の知識を踏まえた意見を求めることがあったという。

当時、前田先生は研究者として脂がのっている時期。精力的に研究を行って著書も次々に上梓していた。先生はその背中を見ながら、研究者としての姿勢を吸収していったそうだ。「作品の解釈と鑑賞は誰でもしている。読みの精度を高めるためには、文学史で文学の流れを押さえ、さらに批評する視点を持つこと。そして、一つでも新たな提示ができれば研究とはいえない。そうした基礎を教わりました」

それでは自分は研究者として何ができるか。先生が着目したのが、前田先生も取り組んでいた樋口一葉研究だった。「その頃、一葉の研究で脚光を浴びているのは前田先生を始め男性研究者ばかり。一葉は女性作家なのに、女性の視点に基づいた研究が進んでいない。それなら自分がやってみよう、と考えたのです」

近代日本が誇る女性作家 樋口一葉の特異さと魅力を追究

樋口一葉は明治20年代後半に活躍した作家で、「近代日本初の職業女性作家」ともいわれる。明治29(1896)年に数え年25歳で亡くなるが、『ごりえ』『たけくらべ』など名作を後世にいくつも残した。

一葉のすごさを、「あくまでも女性の視点に基づきながら、貧富の差や身分制の不条理など、明治時代前期の本質を男性作家以上に鋭く突いている点」と先生は分析する。そして、それを実現した理由は「一葉が使った『擬古文体』だ」と。擬古文体とは、江戸中期から明治、歌人や国学者たちが平安時代の和歌や文章にならってつくった文体である。主体と客体を一体化する視点や、豊かな情感を持つ女性が表現する際に活用しやすい文体、と先生は言う。

「竹取物語に始まる日本の物語文学では、心情や情緒の高まりとともに和歌が挿入されます。歌人でもある一葉の初期の小説作品にはやはり和歌が組み込まれています。彼女は

ある時からそれを自らに禁じてしまいました。その結果、情緒的なものが散文(地の文)に溶け込んでいった。それが一葉の文章の特徴になったと思います」散文で描写などを重ねて構築される小説作品は、ある意味とても現実世界に近い。けれど読者の心を打つためには、読み手の感情を揺り動かす意識を現実から引き離す作用が必要だ。それを可能にする心情や情緒を受け入れる力が擬古文体にはある、と先生は解説してくれた。

明治40年代に入ると、言文一致体が小説文体の主流になっていく。非常に男性的な文体で、これを使いこなすために女性作家たちは苦戦し、男性作家たちから遅れを取るようになった。その意味でも、20年代に才能を開花させた一葉は時代選ばれた作家と言えるのかもしれない。「明治という激動の時代の中で苦労した揚句、早世した可哀な女性、というイメージを抱く人もいるかもしれませんが。けれど、同じ女性という立場で彼女の作品や生涯を研究すると、本当はとても芯の強い人で、弱い点



前田先生の研究手法を応用して執筆された著書・共編著。左下はやまなし文学賞の受賞作。

もしたたかにカバーして生き抜いてきたことがわかります。確かに命は短かったけれど、やるだけのことはやった、充実した人生でした。一葉やその作品に登場する女性たちは、現代にも通じる示唆を私たちに与えてくれると感じます」（拙書『語る女たちの時代 一葉と明治女性表現』参照）

鴎外、漱石、谷崎—— 男性作家が描く女性像を考察

先生がもう一つ取り組んでいるのが、「男性作家が描く女性像」の考察である。「言文一致が小説の主文体的となり、男性作家優位となった明治40年代以降、作家たちがどのように女性を描いたか、またその女性像は女性研究者からどのように見えるのか」が関心の焦点、と先生は言う。現在は、森鴎外や夏目漱石、谷崎潤一郎に着目しているようだ。

鴎外が描く女性像は意外に現実的で、自分から見るとそれほど違和感がない、と先生は続ける。「鴎外は医学者でもありますから、観察眼が冷静で感情的な先入観がない。作品には、暇を持て余している裕福な夫人から高利貸しに囲われる妾まで実にさまざまな女性が登場します。中には哀れな境遇の女性もいますが、それは創作ではなく、この時代に実際に存在した人々です。鴎外はそれに蓋もせず、リアルに描写しています。そして、男性だけが女性を性的な眼差しで見るとはならず、女性側からも男性に対してセクシヤルな視線が



先生の卒業論文。お祖父さまが和綴りで装丁をしてくださった、思い出の品でもある。

注がれている。一方的ではなく、互角なんです。このように考察していくと、厳格なイメージのある鴎外への認識が改まります」

対照的なのが漱石で、女性への思い込みが強いことが作品から伝わってくるようだ。また活躍期間が長い谷崎は、時期によって女性像が変化していく点面白い。最終的にどのような女性像に到達したかを確かめるのが今から楽しみ、と先生は笑った。「女性としては、しっかりと観察して正確に描いてほしい、という思いがあります。女性とはこういうもの」という思い込みで造形をされると、作中の人物が歪んでしまう。何が正確かを一義的に定めるのは難しいですが、男性から見た女性像と女性から見たそれとで、程よいバランスがあると思うのです。研究を通じて、その「程よい」地点を探っていけたら、と考えています」

良質の文学との出会いは 人生を豊かにしてくれる

自身のモットーは「集中・丁寧・誠実」、と先生。「これができていない時は何をしても成果が出ません。

文学だって、集中して、丁寧に、誠実に向き合わなければ本当の価値がわからないし、得られるものの質も変わってしまいます」

文学は映画や音楽と同じ表現手段の一つだが、能動的に一語一語を理解しながら読み進めていかないと、その世界を味わうことができない。手間も時間もかかるがそこが面白い。世界観の中で考えたり、登場人物と対話したり、作家に関心を持つことで自分を高められる、と先生は言う。「近代以前の文学であれば、この時代、このような境遇でも意志を持つことができた、などいろいろな発見があるでしょう。さまざまな時代の、さまざまな人の生き方に触れて知識を蓄える。それが自分のこれからは決める時にも役立つのではないでしょうか」

興味のあることしか読み取らないのはもったいない、と先生は続ける。「一つの作品は、実に多様なもので構成されています。その一つひとつが豊かな要素を含み持っている。それに気づけるかどうかは、集中して丁寧に、誠実にその作品に向き合っているかにかかっていると思います」本当に良い作品に出会うと、感情が揺すぶられて「こうしてはいられない」と行動を起こしたくなる。そんな、自分を触発する作品に出会い、感動を行動に結び付けてより充実した人生を手にしてほしい。柔らかだけれど力のこもった口調で、先生はそう語った。

先生にとっての「特別な一冊」は？

本は教師にとって「ご飯」みたいなもの。毎日接しているのに、「特別な一冊」を挙げるのは大変難しいです。要は、その時々を読む本に集中することだと思います。

高校生へメッセージ

私がそうだったように、高校時代は迷いの連続でいいと思います。ただ、頭だけで考えたり悩んだりしないで、実際に行動し、トコトン突き詰めてみる。この頃の失敗や挫折は周囲も暖かく見守ってくれるはず。勇気を出して、挑戦してみてください。



ジェンダーや、近現代日本文学を学ぶ上で視野を広げられるラインナップ。



2014年夏、日本橋川から隅田川を経て神田川へと至る運河船でのクルージングに参加。「水の都」江戸・東京の面影をしのび、印象深い体験だったとのこと。

“Close up,”



現在の研究テーマを教えてください

近代文学について表象論やジェンダー論の観点からの考察と、文芸映画と原作文学の比較研究、この2つを柱としています。

ご趣味は？

運河船でのクルージングなどを通じて、東京という都市を身体で感じる。これは趣味であるとともに、近代文学を学ぶ上でも大切なことだと密かに思っています。

どんな高校生でしたか？

中学の頃、友人に金ピカの文学少女がいて感化された反動か、高校では軟式テニス部に。しかしすぐに才能がないことを思い知らされ、今度は演劇部に入部しました。

高校生の頃の夢は？

地方の女子高で学んでいましたが、東京の私立大学に進学するためのとりあえずの「将来の目的」として、中学校や高校の英語の先生を考えていました。

お薦めの本を3冊あげてください

- 『文学テキスト入門』
前田愛（ちくま学芸文庫）
文学を味わうだけでなく、本格的に学ぶ上で基本となる考え方が凝縮している、恩師の遺著とも言うべき本。
- 『お姫様とジェンダー—アニメで学ぶ男と女のジェンダー学入門』
若桑みどり（ちくま新書）
ディズニー映画『アナと雪の女王』がなぜ画期的な物語なのか分かる「目からウロコ」の本です。
- 『アンのかみゆりかご 村岡花子の生涯』
村岡恵理（新潮文庫）
NHK朝のテレビ小説の元になった本です。女性文学者の足跡を通して活きた近代史と近代文学が学べるオススメの一冊。